とうきょう すくわくプログラム活動報告書

法人名	株式会社第一コーポレーション
施設名	みらいく池上2丁目園
施設所在地	東京都大田区池上2-4-2

1．活動のテーマ

＜テーマ＞

食べ物と体の関係

＜テーマの設定理由＞

（テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など）
食育は園の保育の柱の一つとして掲げているものである。そのため、日頃の食に対しての取み子どもたちの興味や関心に沿った食育活動や幼児クラスにおいては、園内・シェア畑での野菜栽培からの収穫等を通して、興味や関心が高まっている姿が見られる。すくわくプログラムのテーマの選定・環境・実践・振り返りと共有のサイクルを生かすことで、より子どもたちにとってすくすく成長し、ワクワクするような体験を継続的に行えると考えたため

2．活動スケジュール

①食材が店頭に並ぶまでの動画鑑賞、旬の食材について知り、旬探しを行う。
　スーパーで旬の食材探し、味わってみよう
②夢のお弁当作り
③給食バイキング
④初めて見る野菜
⑤３色食品群を知ろう
⑥体の中の秘密
⑦魚の解体
⑧ジャム作り

3．活動のために準備した素材や道具、環境の設定

活動のために準備した素材や道具
・絵本、お弁当箱、調理器具、プロジェクター、スクリーン、書画カメラ、ラミネート紙、
　粘土、粘土板、ブレンダー、粘土用具、ダストホース、クレヨン、絵の具、筆、筆洗い、
　絵具皿、ホワイトボード、お弁当用品、虫眼鏡、顕微鏡、点字シール、コック服、教育
　エプロン、油性マジック、ボンド、井型ブロック、モール、ワゴン、テーブルクロス、
　パズル、模型、秤、メジャー、定規、ディナーナイフ、クッション、色紙入れケース
環境の設定
・一人ひとりの気づきや疑問の声を拾えるように、グループに分かれ、１グループずつに保育
　士が入り活動を行う
・やってみたい、次は〇〇してみたい、と意欲がもてるように教材等を分かりやすく配置し、
　取り出しやすくすぐに取り組める環境を整える
・豊富な教材を用意し、自分で選べる環境を整える
・子ども一人ひとりの思いを表現しやすく、周りに伝えたい、聞いてもらいたいという思いを
　育めるような環境設定

４．探究活動の実践

＜活動の内容＞

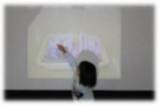
①自分たちの好きな食べ物を発表する
　その食材がどこにある、どこから来ているのかの話し合い
　食材が店頭に並ぶまでの動画鑑賞（小松菜）
　食材には旬があることを知る
　旬の食材を調べる
　スーパーで自分たちが見つけた旬食材探しをする
　見つけた旬食材を皆で味わう
②遠足で、どんなお弁当がいいか子どもたちと話し合う
　入れてほしい物を保護者の方に伝え、できる限りの協力を仰ぐ
　お弁当で嬉しかったことを発表し合う
　どんなお弁当がいいかいろいろな教材を使用して自分だけのお弁当作りを行う
　作ったお弁当を皆に話したい子は発表をする
③皆が作ったお弁当で人気だったおかずの中から食べたいアンケートをする
　人気だったおかず発表を行う
　人気が多いおかずを給食でバイキング形式で自分の好きな量選べる給食を行う
④黒大根と日野菜という野菜と触れる
　包丁で切り断面を観察、虫眼鏡や顕微鏡を使用して細かいところまで観察する
　酢につけることで、色が変化する不思議さを感じる

⑤3色食品群についてどんなことか自分たちで調べたことを話す
　昨日の給食で使用された食材を例にして、給食がバランスよく作られていること
　を聞く
　食材カードや色分けクッションを使って、3色の色分けゲームを行う
　年長児の取り組みとして、毎日の給食で使用される食材を3色食品群に分ける
⑥3色食品群の働きを踏まえた体の中の動きを教育エプロンを使用して見聞きする
　どんなうんちが望ましいのか絵本を読む
　ホースを腸に見立てて、どんな風に動いて食材が運ばれるのかを知る
　ジャガイモを使ってのうんち作り
⑦パズルを使用して、食材の中がどうなっているのかを調べる
　目の前で魚の解体を行い、魚の中はどうなっているのかを知る
　アジの骨抜きを行い、皆の口に運ばれるまでにいろいろな人が関わることで安心
　して食べられるということを知る
　解体をしてくれた講師に質問をする
⑧季節（旬）の食材を知り、調べる
　季節（旬）の食材を使ったクッキングを考える
　ジャム作りに必要な物を知り、どんな材料を使うか話し合い、値段等調べに行く
　購入した食材の重さを量ったり、大きさを測った後、ジャム作りを行い、食す

＜活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり＞

①野菜の栽培から出荷されるまでの動画では夏野菜を育てていたこともあり、興味を持って見る様子があった。
旬について季節の話から伝えていくとすぐに理解して、その後に室内に掲示した季節のマークをつけた野菜や果物のイラストに気付き、児同士で「これは春のマークになっている」と話をしたり、掲示していない野菜や果物の旬について知りたいと話す児もいた。
そのため、秋の旬ボード作りをすることを提案をすると、「やってみたい」という姿が見られていたため、グループに分かれるように環境設定を行う。
絵本等からいろいろな食材を調べ、グループごとに秋の旬ボード作りをする中で、友だちや保育者と「こんな食材があるんだね」と話しながら、探すことを楽しみ、見つけた旬の食べ物に関心を持ったり、身近に感じる様子があった。保育者は本当に合っているのか確認するにはどうしたらよいのか子どもたちに言葉をかけると「スーパーに売っているか見に行く」という話にまとまったことで、子どもたち自身がグループごとに園長に、活動のこと、見に行きたいことを相談しに行く。見るだけで触れなくて良いのか、匂いはかがなくて良いのか？」という問いに「してみたい」との反応であったため、自分たちが見つけた食材を買いに行く。旬のものをバイキング形式で試食する場を設けると、自分たちの五感を使って、
味わうことで楽しみながら秋の旬を感じ、食材について児同士で話題にする場面も見かけることが増えた。

②遠足やお弁当作りの玩具を用意していたことで、それぞれに好きなお弁当を思い浮かべながら期待を持って製作に取り組む様子が見られた。初めて使う素材が多く、どうやって作ろうかと戸惑う児もいたが、見本を見せたり、保育者が一緒に作ることで徐々に意欲的に製作をおこなう様子が見られた。作り始めると、どの児もこだわりを持って集中して取り組み、それぞれが好きなものを詰めたお弁当が完成した。また、続きを作りたいと話す児も多く、朝や夕方に楽しそうに作る様子も見られていた。
発表会では、スクリーンを使って発表する初めての場に緊張する児が多くおり、「発表しない」という児が半数以上見受けられた。だが、他児が保育者と作ったお弁当に対して、いろいろ聞かれたことを答えている姿をみて、やりたいと自ら発表する児が増えていき、最終的には、全園児が発表することになり、発表後も子ども同士で作った物を見せ合いながら会話を楽しんでいる姿が見られた。



③夢のお弁当作りを通して、よく作られていたおかずの中から食べたいものアンケートを食育掲示板にて、保護者と一緒に相談しながら行う。アンケート集計後、実際に食べられることになると、食べられる当日まで、とても期待をもち、「明日だね」「早く食べたいね」と子ども同士で話す、保育者に対しても「どんな風にして食べるの？」と聞いたり、「何が食べたいか決めているの？」という問いをすると、周りの児も加わってバイキング給食の話題ばかりになっていた。
当日は、全員がお弁当バイキングを楽しみに登園してきた。
調理師からの3色食品群の説明も集中して聞くことができ、
自分の好きなおかずを選択してお弁当箱に詰めることを楽しんでいた。バイキング後も絵本を見ながら児同士で「また、やりたい」「緑のやつって体をサラサラにしてくれるんだね」と話し合う姿が見られた。人気メニューを献立に使用したこともあり、食べ進みがいつも以上に良かった。

④匂いや形から「大根かな？」「ごぼうみたい！」と初めて見る野菜に興味をもち、何の野菜か自分なりの答えを見つけようとしていた。黒大根は「中まで真っ黒？」「ピンクだったら嬉しいな！」とわくわくしながら切ってみると、「あれ～、普通の大根と一緒だ」と外と中の紗違いに不思議な感情を抱いていた。
野菜は酢に漬け色が変わる様子を観察すると「可愛くなった！」「おいしそうだね！」と大喜びであった。

⑤今までの取り組みを通して食材に対しての興味や関心、知ることを楽しんできたことで、給食バイキング時の食べ物には3つの力があることを知り、その後も3色の力の絵本を友達と読んだり、保育者に「〇〇（食材）は〇〇の力なんだって」と自分が知り得た事を伝える姿が継続して見られていた。改めて3色食品群の話を聞いた上で、実際に身体を動かすことで、楽しく理解を深めていき、始めは保育者や栄養士に「これでいいのかな・・」と確認していたので、野菜は何色って話だったかな？」「これは、お肉？野菜？」と言葉をかけつつゲームを重ねていくうちに、どのような特徴があってそれぞれのグループに分類されるのかがだんだんと理解していく様子が見られた。
毎日の給食に使用されている食材を3色食品群ボードに振り分けていく作業を年長児が行うようになり、保育者と一緒に取り組む姿から、「自分でやるから」とやったことを見せに来るようになった。ボードを食育の掲示板に掲示することで、全園児保護者の方が足を運んでくれる機会がとても増えた。

⑥エプロンシアターの説明を聞きながら自分のお腹を触り位置を確認することで理解が深まっていた。
小腸の長さを視覚的に見せると想像以上の長さに驚いていた。
食材をフードプロセッサーやハンドミキサーを使用し咀嚼後の内容物に似せることで、胃の中と腸の中にある大きさや形状の差について知ることができた。ホースの中で蠕動運動をして消化物が運ばれている様子を見ることで、よく噛むことやたくさん体を動かすことが消化吸収につながることが理解できていた。

⑦事前に魚の解体図や玩具、お寿司屋さんごっこを楽しんだり、大将の情報などを掲示していたことで当日の活動に期待をもちつつ、魚の体に興味も持って参加することができていた。解体を見て体の仕組みを理解し「魚の中は小さいのが（内臓など）多いね」と児同士で会話する姿が見られた。また、保育者と一緒に解体ショーを見ながら「ここはなに？」と確認しながら行うことができた。
サワラを見て興味を持つ児も多く、解体の様子も集中して観察している様子が見られた。実際に栄養士が部位の説明をしながら周ることで、いろいろな意見が飛び交う様子も見られた。
当日は２、３歳児も見学し、間近で魚をさばく様子や体のつくりを見ることができ、自ら「これは何？」と大将や栄養士に質問をする姿が見られた。

⑧ジャム作りに必要な物を栄養士に教えてもらい、必要な材料を買いに行くにあたり園長に相談した際に、「どうして作りたいのか？」「何故いろいろな砂糖を使いたいとなったのか」等問うと、一度クラスに戻って再度皆で話し合い、しっかりと自分たちがどうしたいのかを皆で共有する姿が見られた。
ジャム作りをするにあたって、量りや定規等と使用して、大きさや重さを量ると、「こっちの方が大きい」等のやり取りが生まれていた。匂いが立ってくると、「早く食べたい」という声が自然に上がってきており、鍋の中で変化していく様子を逐一覗き込んで確認していた。出来上がった数種類のジャムを食し、自分の好きなジャムを見つけたり、似ている味を保育者と一緒に見つけて楽しんでいた。

５．振り返り

＜振り返りによって得た先生の気づき＞

保育の３つの柱の一つである食育活動は今までも取り組んできていました。ですが、その食育活動はその場限りで終わってしまうこともあり、なかなか連続性のある保育の実践が難しかったこともあります。今年度、探究活動の実践のための工夫や子供の好奇心・探究心を高めるための取り組みとして、「次につながっていく保育」を意識していきました。初めは、導入するにもどうしていったら良いか、子どもの主体性を邪魔しないかかわり方は？ととまどうことも多々ありました。すくわくプログラムを進めていく中で、まず変化していったのは、保育者でした。子どもの声を拾える回数も増え、子ども自身が気づいて行動に移し次につなげていくためのかかわり方も意識するようになりました。

子どもたちも、保育者とだけでなく、子ども同士での探究に対しての対話がとても増えました。「〇〇かな～？」と保育者に確かめるような話し方から「〇〇だから、〇〇したい」と自分の考えを発信する力、友だち同士で「〇〇だから、〇〇しよう」と共有して進めていく姿が見られてきています。

「食べ物と体の関係」をテーマに進めたことで、苦手な物もあれば、好きな物もある、そのひとつひとつの食べ物が身体に作用する働きの大切さをいろいろな食材や取り組みを通して学び、食に対してより身近に感じられるようになりました。また、普段食べている物は誰かの手が加わることで、自分の下に届いているという「見えない人とのつながり」を伝える機会にもつながっていきました。

次年度以降も探求する心を育みながら、今年度得た保育者自身の気づきをより高めていけるようにしていきます。